

No.2



散文詩集



一人の男が遮断機へと飛び込む



岡田文弘

焼畑農業

焼き畑農業をしようと思ったので、ぼくはスーパーマーケットで出来合いの畑をひとつ買ってき
た。さっそく枯れ草をその畑の上に載せて、火をつける。畑はたちまち炎に包まれ、空が赤く染まっ
た。

ぼくは暖炉の横でウキスキーをちびりちびりと飲みながら、鎮火を待っていた。

折りしもその時勃発した核戦争によって人類は滅亡した。

テレビ画面に真っ白なきのこ雲が映り、突然映像が途切れたその瞬間に、我が畑はぶすぶすと音
を立てながら血気盛んな炎をひっこめた。

ぼくはウキスキーの瓶を完全にとらつぽにしてから外に出た。

ぼくの家と、ぼくの畑を除くすべてのものが消滅していた。見渡す限り、なにもなかった。地平
線の向うまで、なにもなかった。

ぼくは、まだほんの少しくぶつている枯れ草を足で押しつけて、炭化した地面の上に男女二体
の退治が丸くなって眠っていることを確認した。

「つまりはこの子らがはじまりなんだな」

男の子の胸には、肋骨の形がうつすらと浮き上がっている。しかし、そのうちの一本が欠けてい
る。

やがて二人はすくすくと育ち、まばゆいばかりに美しく清らかな若者たちに成長した。

ぼくは、そんな汚れなき二人を心が焦がれるほどに愛した。焦がれた心はねじ曲がって、愛はい
つしかうらやみとなり、そして嫉妬に変わった。

とうとうぼくは、二人を墮落の谷に突き落とした欲望を抑えられなくなった。ぼくは家の中に入
って、この日のために用意しておいたリングゴを取り出す。そしてうす汚れた三面鏡の前で化粧
の秘技を駆使し、ヘビに変装する。

トニーおじさん

トニーおじさんが台所でカン高い悲鳴を上げたので、急いで行って見たところ、床からカベから何から何まで真っ黄色に染まっていた。

「どうしたの!？」

「知らんよ!」トニーおじさんは真っ黄色になった自分の顔を拭いながら言った。「卵が爆発したんだ!」

このような理由で夕食のオムレツはあきらめざるを得なくなり、僕らはパンだけで腹を満たすはめになった。

「どうもあの卵売りはうさんくさいやつだったな」トニーおじさんはまだブツブツ言っている。

「べらぼうに安い値で売りつけやがるから、おかしいと思っただ。やっぱり欠陥商品だったんだ!」

そこに姪が帰って来た。

「お帰り」とトニーおじさん。「メシはどうする?」

「もう食べて来た」そう言い残して姪は二階へ上がり、三角関係をテーマにした小説の続きを書き出した。僕は姪をうらやましく思う。外で、さぞかしうまいものを食ってきたに違いない。

上目遣いにトニーおじさんを見ると、彼もまた同じことを考えているようで、惘然とした面持ちで堅いパンを齧っていた。

やがて二階から、男二人と女一人の計三人が互いに甘い言葉で罵り合う声が聞こえてきた。トニーおじさんは舌打ちして上を向き、「くだらん恋愛物ばかり書きよって!三角関係にしか興味がないのか、あのロクデナシは!」

そして僕の方を向き直って、忌々しげに言った。「絶対にあいつを小説家にするわけにはいかん」